

令和3年11月27日
公益財団法人
中村元東方研究所
専任研究員
法清寺住職
奈良修一

諸宗教の連帯による傷ついた世界への奉仕：ひとつの仏教的見方

1 はじめに

まず、題名の「ひとつの仏教的見方」について触れておきたいと思います。これは、父である師匠から次のように習ったからです。

「仏教ではこうである」とは言うな。というのも、それは、いかにも客観的のようであるが、自分が仏教を代表して言うことになる。仏教は、教理だけでなく、生き方であるのだから「仏教徒として、私は、こう考える、こう行動する」と言いなさい」

今回も、与えられたテーマに、仏教徒として私なりの考えを述べさせていただくので、このようなタイトルとさせて頂きました。

2 辛い現実に向き合うか

「傷ついた世界」を考えるときに、現実楽しいことばかりではありません。苦しんだりする、辛い現実があります。その様な現実に向き合うべきでしょうか。

仏典には、キサー・ゴータミー (Kisā Gotamī)の話があります。キサーとは、「痩せた」、ゴータミーとは「ゴータマ姓の女性」という意味です。

彼女は、生まれてきて、やっと歩けるようになった子供に死なれてしまいました。半狂乱になった彼女は、子供を生き返らせる薬はないか、求めてさまよいました。もちろん、その様な薬があるはずがありません。ある人の勧めで、釈尊のもとを訪れました。釈尊は、「ひとつかみの白カラシの種をもらってなさい。ただし、息子でも娘でも、誰もいまだ死んだ人がいない家からもらうのですよ。」

それを聞いた彼女、死んだ子を抱えたまま、村の中に入り、次々と家を訪ねては、白カラシの種を求めました。しかし、死人を出したことの無い家はなく、種を得ることができません。何件も尋ねましたが、いまだに家族を失ったことの無い家がないことに気づきました。そこで、「私の子供だけが死んだのではない」ということに目覚め、釈尊のもとに戻り、出家し、「キサー・ゴータミー尼」として承認されました。

このように、辛い現実に向き合うのではなく、その事実を事実として受け止めるところに、辛い現実を乗り越えることができるのだ、と説かれているのです。

このような姿勢は、江戸時代の良寛(1758-1831)の次の言葉でも明らかです。

「災難にあう時節には災難にあうがよく候。死ぬる時節には死ぬがよく候。これは災難をのがるる妙法にて候」

言葉自身は、きつい言い方に見えますが、真の意味で相手を思いやっている言葉なのです。良寛のこの言葉は、1828年、新潟三条の大地震で娘を亡くした俳人・山田杜阜（やまだとこう）に宛てた見舞の言葉なのです。

仏教は人を救う道だと言われます。これは単にやさしい言葉で慰めるだけでなく、真実に向き合うことを基本とします。思い通りにならない現実に向き合ってこそ、救われるのだと説いているのです。

仏教の基本は「四法印（しほういん）」(caturmudrā)に表現されています。それは、以下の通りです。

漢文	Sanskrit
諸行無常	anityāṃ sarvasaṃskārāṃ
諸法無我	sarvadharmā anātmānaḥ
一切皆苦	duḥkkāḥ sarvasaṃskārāḥ
涅槃寂静	śāntaṃ nirvāṇaṃ

「諸行無常（しよぎょうむじょう）」とは、常に移り変わり、永遠不滅なるものはない、ということです。次の「諸法無我（しよほうむが）」とは、その真理は、すべてに通じ、普遍く及んでいる、ということです。「一切皆苦（いっさいかいく）」は誤解されやすい句です。「すべてが苦しみである」と捉えると、「何故、苦しみだけを取り上げるのか、楽しいことだってあるのではないか。苦楽はあざなえる縄の如し、と言うではないか」と反論されます。これは、「苦」と漢訳したことから誤解が生じるのです。漢文では、対句で考えることが多いため、「苦」があれば「楽」があると考えます。それですので、「すべてが苦である」と言われると、先程のような反論が出てくるのです。

しかし、サンスクリットでは「duḥkka（ドゥッカ）」となっています。これは、「(腕などが)、固定されて自由に動かせない」、という意味です。漢文では「苦」としか訳しようがないのですが、現代語に訳すと「すべてがすべて思い通りに行くはずがない」となります。これならば、誤解無く理解頂けると思います。

最後の「涅槃寂静（ねはんじゃくじょう）」とは、現実を現実として受け止めて、心を静めていく、という意味です。

このように、現実は、思うようにならない、その現実を現実として受け止めて、前向きに生きていこう、というのが基本になっています。

3 どのように共に生きるか

先程述べてきたことは、現実を受け止めて、生きていくという、一人一人の生き方です。それでは、人々の繋がりがなくて良いのか、と言われるかもしれません。そういうわけでは

なく、やはり、人との関係を大事にしていく必要があります。

そこには、「自未得度先度他（じみとくどせんどう）」ということが大事にされます。大乘仏教の菩薩が理想とした衆生済度（しゅじょうさいど）の論理です。『大般涅槃經（だいはつねはんきょう）』巻38に始めてでできます。日本仏教では、既に聖徳太子にこの発想が見え、また伝教大師最澄を始めとする天台宗の各祖師にも類似した表現は見えます。しかし、この用語そのものを使った例は多くありません。その少ない例の一つが道元禅師の言葉です。

道元禅師は、これを菩薩としての生き方として示しました。そこではまず、修行の志とは、自未得度先度他として起こされなくてはならないとされています。

発心（ほっしん）とは、はじめて自未得度先度他の心をおこすなり。これを初発菩提心（はつほつぼだいしん）といふ。この心をおこすよりのち、さらにそこばくの諸仏にあひたてまつり、供養したてまつるに、見仏聞法し、さらに菩提心をおこす、雪上加霜（せつじょうかそう）なり。

『正法眼蔵（しょうぼうげんぞう）』「発菩提心（ほつぼだいしん）」

では、これは、どのような意味なのでしょう。か。「自（みづか）らは未（いま）だ度（ど）を得（え）ざるも、先（ま）ず他（た）を渡（ど）す」と読むと良いと思います。自分はずでに悟っているけれども、人々を救うのだ、と言う意味ではないと思います。自分はまだまだ、未熟だけども、それでも人々の為になろう、と理解すべきです。

それでは、どのような行いが人々の為になるのでしょうか。道元禅師は、布施（ふせ）、愛語（あいご）、利行（りぎょう）、同事（どうじ）という四つの行い、四摂法（しししょうぼう）を説かれています。布施とは、現在は、お檀家さんがお寺さんにだすお礼だけを指していますが、本来は「ダーナ」といい、人に物を施すことを言います。さらに、これは相互に与える物です。たとえば、社長は社員に給料を出しますが、一方で、社員は会社のために働いてくれます。この両方とも布施なのです。

愛語というのは、ものでなく、言葉でする布施です。利行は、行為でする布施です。ボランティア活動などがこれに当たります。最後の、同事は、布施、愛語、利行を行うさいの基本的な態度をいいます。相手の立場、状況をわきまえず、布施しても、逆に、相手の為になりません。そうならないように、相手の事を理解していくことを言います。道元禅師は次のように述べています。

同事といふは、不違（ふい）なり。自にも不違なり、他にも不違なり。たとへば、人間の如来は人間に同ぜるがごとし。人界に同ずるをもてしりぬ、同余界なるべし。同事をしるとき、自他一如（じたいちにょ）なり。

『正法眼蔵菩提薩埵四摂法（しょうぼうげんぞうぼだいさつたしししょうぼう）』

簡単に相手になりきることはできませんが、そのように務めることが必要なのです。

仏教では、教えの基本は、「法 (Dharma)」と言いますが、これは、「真理 (satya, sacca)」と言っても良いものです。基本は、この法、真理に即して生きていくことです。

この真理について、19世紀、インドの宗教家であるラーマクリシュナ (Rāmakṛṣṇa Paramahansa, 1836-1886)が次のように述べています。

「同一のゴールに到達するために、じつにたくさんの道がある。……私はヒンドウイズム、イスラーム、キリスト教、そしてヒンドウイズムのなかではまたさまざまな宗派の修行を実践した。それで私は、道こそちがえ、それらすべてがめざしているのは同一の神であるということを知ったのである。……池のふちには何ヵ所かに階段 (ママ、ガトーのこと) がついている。ヒンドウーはそのなかの一ヵ所で水をくんでジャルと呼び、回教徒 (ママ、イスラーム教徒のこと) はもう一つの階段でパーニと呼び、キリスト教徒は第三の階段でくんでウォーターと呼ぶ。名前はちがうが物は同一である。またみなは同じものを求めているのだ。世界の各宗教はこの階段の一つひとつのようなものである。どの階段でもよい、真剣に熱心に進んで行け。不滅の至福という水をくむことができるだろう。ただし、自分の階段は他の階段より良い、などと言ってはいけない。」¹

このように、真理 (神) を求めて生きていくことが重要だと思います。ですから、インド独立の父であるマハートマー・ガンディー (Mahātmā Gāndhī, 1869-1948)は、「サティヤーグラハ (satyāgraha)」と名付けた非暴力抵抗運動を起こしたのも、この流れで理解できるでしょう。

4 結論 およばずながら

法、真理に即して生きていくことは、言葉で言うのは簡単ですが、実践はそう簡単ではありません。最初から、完璧になどはできません。しかし、目指さなくてはまったくできません。少しずつでも、それを目指していくことが必要でしょう。「およばずながら」という姿勢が必要です。少しずつでも、真理に従っていくという前向きな生き方が必要だと思います。それが、「傷ついた世界に奉仕」していく生き方につながると思います。

¹日本ヴェーダーンタ協会のHP

<http://www.vedanta.jp/jp/contents/person/sr/ramakrishna.html>

より引用